

幼少期のアタッチメント形成が青年期に与える影響について

— 幼少期のアタッチメントの連続性から考える —

瀧 川 由 美 子

はじめに

戦後50年の社会の変化は、家族や学校のあり方を変え、子どもや青年期の若年者の発達環境を激変させた。その中でも青年期は対人関係が大きな転換期を迎える時期であるといわれている。また、現代社会では人間関係の希薄化や家族関係の多様化により、青年期の様々な問題が表面化している。その背景には対人関係での出発点である乳幼児期の母子関係や重要他者との対人関係の問題が影響しているとも考えられる。

Bowlby¹⁾²⁾はAttachment理論(1973・1993)で、特定の個人に対して親密な絆を結ぶ傾向を人間性の基本的な構成要素としている。それはすでに新生児期に原初的な形で存在し、成人から老年に到るまで存在しつづけるとしている。はじめは乳児と母親の唯一のコミュニケーションの手段は、情緒表現とそれに伴う行動を通してのもので生涯を通して、親密な関係の基本的な特徴として存続するとしている。また母親との相互作用により特別な絆(bond)が形成され、それを安全基地として乳幼児は外界を探索する。この経験の累積から個人愛着の表象モデル(IWM)が発達するとしている。

そこで今回、現在の成人期AttachmentであるInternal Working Model(IWM)の発達と幼少児のAttachmentの形成と関連について本学衛生看護学科の1、2回生に質問紙調査を行った。他の背景を含め、調査内容を分析することで幼少期のAttachment形成が現在の青年期に与える影響について愛着形成の連続性の観点から示唆を得たのでここに報告する。

I. 方 法

1. 対象者

本学衛生看護学科1・2回生105名の看護学生。

2. 調査方法および内容

調査方法は平成15年7月25日に質問紙調査を実施した。(回収率;100%)

調査内容は、①幼少期のAttachmentの測定;Ainsworth(1978)のSS法の3群(安定型secure群・回避型avoidant群・アンビバレント型ambivalent群)の内容を基に青柳ら(1997)が作成した尺度を用い、対象者に小学校入学以前(6歳以前)の母親との関係を回想させる質問紙調査、②現在のアタッチメントの測定;託磨らがHazan&Shaverの単一項目尺度による分類を基準に作成した尺度を用いた現在のAttachment(IWM)の質問紙調査(Attachment Styleの3群;安定型secure群・回避型avoidant群・アンビバレント型ambivalent群)、③その他対象の背景からなる。

統計処理は、Ecell Statcelで実施し、一元配置分散分析法とピアソン相関係数の検定を行った。

Ⅱ. 結果

1. 対象の背景

対象は、本学衛生看護学科1年生28名、2年生77名、計105名であった。全体の平均年齢は19.6歳であった。その他の対象の背景は表1のとおりであった。

表1 対象の背景

		n=105 人 ()は%		
項目	学 科 年	全 体 n = 105	看護1年生 n = 28	看護2年生 n = 77
平均年齢		19.6歳	18.96歳	19.81歳
現在の生活形態	家族と同居	67 (63.80)	26 (92.86)	41 (53.24)
	独り暮らし	14 (13.33)	1 (3.57)	13 (16.88)
	学生寮	24 (22.86)	1 (3.57)	23 (29.87)
	不明	0	0	0
出生順位	長 子	34 (32.38)	5 (17.86)	29 (37.66)
	中 間 子	27 (25.71)	7 (25.0)	20 (25.97)
	末 子	30 (28.57)	13 (46.43)	26 (33.77)
	一人っ子	3 (2.86)	2 (7.14)	1 (1.30)
	そ の 他	1 (0.95)	0	1 (1.30)
家族構成 (本人を 含む)	3 人	6 (5.71)	3 (10.71)	3 (3.90)
	4 人	39 (37.14)	12 (42.86)	27 (35.06)
	5 人	30 (28.57)	7 (25.00)	23 (29.87)
	6 人	18 (17.14)	4 (14.29)	14 (18.18)
	7 人以上	10 (9.52)	2 (7.14)	8 (10.39)
	そ の 他	2 (1.90)	0	2 (2.60)
祖父母との同居 有 無 (高校まで)	有 り	30 (28.57)	8 (28.57)	22 (28.57)
	無 し	75 (71.43)	20 (71.43)	55 (71.43)

2. 幼少期Attachmentと成人期Attachment (IWM) について (表2・3)

1) 幼少期Attachment項目について

幼少期アタッチメント項目の得点平均と標準偏差を表2に表した。幼少期では安定型の項目の「幼い頃、親の側で安心感があった」「幼い頃、私は親を好きだった。」が全体で4.13、4.16と高く、学年別でも同様の傾向があった。また、回避型の「幼い頃、いつか見捨てられるのではないかと思った」は全体で2.00±1.30で学年別同様低い傾向にあった。ただし、不安定型の「幼い頃、私は親の顔をうかがって行動していた」は全体で3.85±0.82とやや高い傾向にあった。

2) 成人期Attachment (IWM) について

現在のアタッチメント項目 (IWM) の得点平均と標準偏差は表3に示した。現在の青年期の全体では不安定型の項目の「時々友達が自分を好いてくれないとか、私と一緒にいたくないのでは

と心配になることがある」 3.45 ± 1.10 、「ちょっとしたことでもすぐに自身をなくしてしまう」 3.43 ± 1.08 が高い傾向にあった。また、幼少期のアタッチメント項目同様、回避型の項目の「あまり人と親しくするのは好きではない」 2.33 ± 1.03 で一番低い傾向であった。

表2 幼少期 Attachment

項 目 内 容	全体 n = 105 mean \pm S.D.	1 回生 mean \pm S.D.	2 回生 mean \pm S.D.
安定型			
幼い頃、親の側で安心感があった。	4.13 \pm 1.04	4.29 \pm 0.90	4.08 \pm 1.09
幼い頃、私は親を好きだった。	4.16 \pm 0.98	4.11 \pm 0.95	4.18 \pm 1.00
幼い頃、私は親に良くほめられた	3.26 \pm 1.03	3.21 \pm 0.83	3.27 \pm 1.096
不安定型			
幼い頃、私は親の顔色をうかがって行動していた。	3.85 \pm 0.82	3.14 \pm 0.93	3.84 \pm 0.88
回避型			
幼い頃、いつか見捨てられるのではないかと思った。	2.00 \pm 1.30	2.00 \pm 1.15	2.00 \pm 1.38
幼い頃、私は親の愛情が薄いと思ったことがあった。	2.37 \pm 1.32	2.71 \pm 1.27	2.25 \pm 1.33
幼い頃、私は同じことをしていても、怒られたり、怒られなかったりした。	2.70 \pm 1.22	2.68 \pm 1.06	2.71 \pm 1.28
幼い頃、私は親に怒られた時、なぜ怒られたかわからなかった。	2.30 \pm 1.12	2.11 \pm 0.92	2.38 \pm 1.18

表3 成人期 Attachment (I WM)

項 目 内 容	全体 n = 105 mean \pm S.D.	1 回生 mean \pm S.D.	2 回生 mean \pm S.D.
安定型			
私はすぐに親しくなるほうだ	3.02 \pm 1.09	2.96 \pm 1.00	3.04 \pm 1.13
私は知り合いができてやすいほうだ。	3.08 \pm 1.01	2.96 \pm 1.00	3.12 \pm 1.01
私は人に好かれやすい性質だと思う。	2.78 \pm 0.84	2.50 \pm 0.75	2.88 \pm 0.86
気軽に人に頼ったり、頼まれたりすることができる。	3.08 \pm 0.92	3.11 \pm 0.63	3.06 \pm 1.00
初めて会った人でも上手くやっていく自身がある。	2.83 \pm 1.08	2.75 \pm 1.17	2.86 \pm 1.05
不安定型			
ちょっとしたことでもすぐに自身をなくしてしまう。	3.43 \pm 1.08	3.36 \pm 0.87	3.45 \pm 1.15
あまり自信が持てないほうだ。	3.42 \pm 1.07	3.18 \pm 0.98	3.51 \pm 1.10
自分を信用できないことがよくある。	3.18 \pm 1.14	3.18 \pm 1.02	3.18 \pm 1.19
時々友達が自分を好いてくれないとか、私と一緒にいたくないのではと心配になることがある。	3.45 \pm 1.10	3.71 \pm 0.81	3.35 \pm 1.18

回避型			
私は誤解されやすいほうだ。	2.96±0.95	3.21±0.92	2.87±0.95
どんなに親しい間柄であろうと、あまりなれなれしい態度をとられると嫌になってしまう。	2.67±1.25	2.54±1.14	2.71±1.29
あまりにも親しくされたり、ことらが望む以上に親しくなることを求められたりするといらいらしてしまう。	2.95±1.09	3.14±1.08	2.88±1.09
あまり人と親しくするのは好きではない。	2.33±1.03	2.32±0.67	2.34±1.13
人は全面的には信用できないと思う。	2.89±1.17	2.96±0.88	2.86±1.26
私は人に頼らなくても自分ひとりで上手くやっていると 思う。	2.18±1.00	2.14±0.89	2.19±1.04
人に頼るのは好きではない。	2.86±1.10	2.79±0.79	2.88±1.20

3. 各尺度別幼少期Attachmentと成人期Attachment (IWM) の平均値 (表4・図1)

幼少期のAttachmentと現在の成人期AttachmentのIWMの尺度別の平均値を表3・図1に表した。その中でも幼少期のAttachment尺度のうち、幼少期安定型が3.851と平均得点が一番高く、また全体でも一番高かった。

また、一番低い得点は幼少期でも全体でも幼少期不安定型の2.345であった。また、幼少期と現在の成人期Attachmentとを各尺度別で比較してみると、安定型は現在の方が低くなっているが、回避型、不安定型は幼少時より現在の方が高い平均値を示していた。また、一元分散分析により各尺度間に有意差がみられた。

表4 各尺度別 Attachmentの平均値 (p<0.05)

各尺度項目	平均値	不偏分散	標準偏差
幼少期安定型	3.851	0.675	0.822
幼少期不安定型	2.867	1.713	1.309
幼少期回避型	2.345	0.865	0.93
成人期安定型	2.956	0.615	0.784
成人期不安定型	3.288	0.537	0.733
成人期回避型	2.646	0.552	0.743

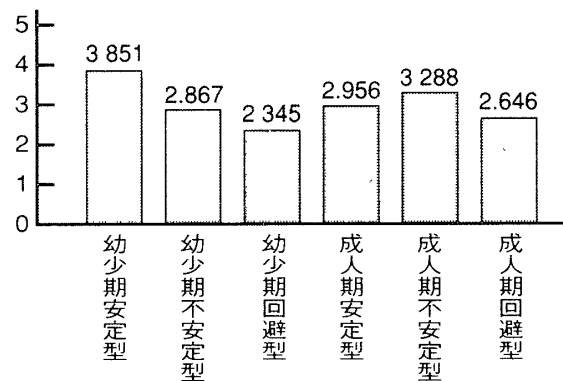


図1 各尺度別アタッチメントの平均値

4. 各尺度別の幼少期Attachmentと成人期Attachment (IWM) との相関

各尺度別平均得点の相関をみてみると、幼少期安定型と成人期回避型には有意な負の弱い相関がみられた。(γ = -0.22304, p<0.05)、また同様に、幼少期回避型と成人期安定型には有意な負の弱い相関がみられた。(γ = -0.23801, p<0.05) また、幼少期安定型と成人期安定型にわずかに弱い正の相関が有意にみられた。(γ = 0.192637, p<0.05)

5. 親友の数と各尺度別幼少期Attachment、成人期Attachment (IWM) の平均値の比較

親友の数を多い、ふつう、少ないで問うと多いと答えたものは23名 (24.76%)、ふつうが72名 (68.57%) と一番多く、少ないが10名 (9.52%) であった。

親友の数の多さと各尺度別の平均得点を比較してみると (表5)、幼少時安定型、IWM安定型は親友の数が多いほど平均値が有意に高い傾向がみられた。また、不安定型は親友の数が少ないと答えた学生の方が平均値が高い傾向がみられた。回避型も同様に少ないと答えた学生の方が高い傾向がみられた。

表5 親友の数と各尺度別Attachmentの平均値の比較 (p<0.05)

各尺度項目	親友の数		
	多 い n = 23	ふ つ う n = 72	少 な い n = 10
幼少期安定型	4.261	3.787	3.367
幼少期不安定型	2.25	2.778	2.7
幼少期回避型	2.696	2.326	3.9
成人期安定型	3.487	2.944	1.82
成人期不安定型	3.487	3.141	3.88
成人期回避型	2.623	2.597	3.05

Ⅲ. 考察

Bowlby¹⁾ はAttachment理論 (1973・1993) で、特定の個人に対して親密な絆を結ぶ傾向を人間性の基本的な構成要素とし、それはすでに新生児期に原初的な形で存在し、成人から老年に到るまで存在しつづけるとしている。また、乳幼児の経験が表象モデルの中に取り込まれ、意識的あるいは無意識的に新しい状況や関係の中でも総長的に機能し、より一般性をもった関係性モデルとしての個人の行動組織化に寄与することになるとも述べている。これは乳幼児期の母親また他の重要他者との愛着形成が以後の青年期などの対人関係などの社会化の成長発達に重要な影響を与えることを示唆している。

今回の幼少期のAttachmentとIWMの尺度の結果では、全体の尺度のうち、幼少期安定型が3.851と平均得点が一番高かった。また、一番低い得点は全体では幼少期不安定型の2.345であった。また、幼少期と現在の成人期Attachmentとを各尺度別で比較してみると、安定型は成人期Attachmentの方が平均得点が低くなっているが、回避型、不安定型は幼少期より現在の成人期Attachmentの方が高い平均値を示していた。本結果では、幼少時は母親などの重要他者から比較的安定したAttachmentを得られているが、成長するにしたいが、安定型より回避型また、不安定型が多くみられる傾向があるといえる。これは現代の青年期の対人関係の特徴が現れているとも考えられ今後の検討課題である。

次に各尺度別平均得点の相関の結果では、安定型幼児と回避型成人には有意な負の弱い相関がみられた。また、同様に、回避型幼児と安定型成人にも有意な負の弱い相関がみられた。安定型幼児と安定型成人には有意にわずかながら弱い正の相関がみられた。これらの結果と同様に木村³⁾らの研究結果でも幼少時のAttachmentとIWMの安定型、不安定型、回避型それぞれの間にも正の相関がみられている。幼少期に母親あるいはそれに代わる人との間に形成された安定したAttachmentと現在の他者に対するAttachmentとの関連が示唆されたとも考えられる。

今回、尺度別と対人関係との関連として親友の数の多さと各尺度との比較を試みた。表4の結果のように幼少期、IWMとも安定型では親友が多いと答えた学生の方が平均得点が高く、少ないと答えた

ものが低い傾向がみられ、その反対に不安定型、回避型は親友が少ないと答えた学生の方が高い平均得点傾向がみられた。木村らが行った親和傾向尺度と成人のAttachmentの関連でも、IWMの安定型と親密さ欲求とは正の相関があり、その反対に逆転項目の共存欲求は負の相関がある結果を示している。また、同様に青柳らは⁴⁾、現在のAttachmentスタイルを安定型 (secure)、とらわれ型 (preoccupied)、拒否型 (dismissing) 恐怖型 (fearful) の4群に分け、その中でも安定型が対人関係の親和性の因子が高得点であり、親和性との関連を認めたと述べている。今回、木村らが実施した対人関係尺度については調査を行っておらず、親友の多さのみでの比較となったが、本結果では今回、木村、青柳らの結果との関連を示唆す結果となったといえる。

Bowlby¹⁾ は、幼少期に確立したAttachmentスタイルは、その後のAttachmentスタイルを規定し、移行するとしている。今回の調査でも幼少期のAttachmentと現在のAttachmentとの関連性が示唆された。また、幼少期のAttachmentと現在のAttachmentと現在の対人関係との関連でも、親友の多さのみの検討ではあるが、安定型の場合、現在の安定的な人間関係が示唆された。BowlbyがAttachment人物への信頼感が対人関係の基礎を成していることと述べていることから妥当な結果と考える。

現在は生涯にわたる愛着形成の連続性について様々な研究が行われてはいるが、まだこれらの研究が過渡期の研究段階だといわれている。Attachmentの生涯発達の研究のなかでも乳幼児期から生涯発達過程全体に以降し、各発達時点における愛着を測定する重要性が高まってくると考えられる。Bowlby¹⁾ は、乳幼児期の経験が表象モデルの中に取り込まれ、そのモデルが高い時間的安定性を保つ結果、それを基盤として発動される様々な社会的行動も、結果的に高い一貫性と連続性を備えるようになると仮定している。今回の調査では先行研究 (戸田や青柳らの⁵⁾) の追試であったが、愛着形成の連続性が示唆されたといえる。今後はAttachment形成においては、乳幼児期においても、母親以外の様々な対人関係を持つことなどから主要な母親以外の表象モデルや、他の様々な環境要因の変化がAttachment形成にどのように影響しているかについても検討の必要性があると考えられる。また青年期以降の成人期または老年期以降においても今後の研究が望まれる。

IV. まとめ

1. 幼少期Attachment項目で安定型の項目の「幼い頃、親の側で安心感があった」「幼い頃、私は親を好きだった。」が全体で平均得点が4.13、4.16と高く、学年別でも同様の傾向があった。また、回避型の「幼い頃、いつか見捨てられるのではないかと思った」は全体で 2.00 ± 1.30 で学年別同様に低い傾向にあった。ただし、不安定型の「幼い頃、私は親の顔色をうかがって行動していた」は全体で 3.85 ± 0.82 とやや高い傾向にあった。
2. 現在の成人期Attachment (IWM) 項目では不安定型の項目の「時々友達が自分を好いてくれないとか、私と一緒にいたくないのではと心配になることがある」 3.45 ± 1.10 、「ちょっとしたことでもすぐに自身をなくしてしまう」 3.43 ± 1.08 が高い傾向にあった。また、幼少期のアタッチメント項目同様、回避型の項目の「あまり人と親しくするのは好きではない」 2.33 ± 1.03 が一番低い傾向であった。
3. 幼少期Attachment、成人期Attachment (IWM) の尺度全体の中で平均得点を比較すると、幼少期安

定型が3.851と一番高かった。また、一番低い得点は幼少期不安定型の2.345であった。また、幼少期と現在の成人期Attachmentを同じ尺度で比較してみると、成人期Attachmentは幼少期に比べ安定型は平均得点が低く、その反対に回避型また、不安定型は平均得点が高い傾向がみられた。

4. 各尺度別平均得点の相関は、幼少期安定型と成人期回避型には有意な負の弱い相関がみられた。同様に、幼少期回避型と成人期安定型にも有意な負の弱い相関がみられた。幼少期安定型と成人期安定型には有意に弱い正の相関がみられた。
5. 幼少期Attachment、成人期Attachmentの尺度の両方とも安定型では、親友が多いと答えた学生の方が平均得点が高く、少ないと答えたものが平均得点が高い傾向がみられ、その反対に不安定型、回避型は親友が少ないと答えた学生の方が高い平均得点傾向がみられた。

おわりに

看護学生に母性看護学を講義していく中で教員自身また学生自身の母性観についても構築していくことが要求される。そのなかで母子のAttachment理論は母性観の構築のなかでも重要な理論とされる。また、現代社会では人間関係の希薄化や家族関係の多様化により、青年期の様々な問題が表面化している。その背景には対人関係での出発点である乳幼児期の母子関係や重要他者との対人関係の問題が影響しているとも考えられる。これらのことから今回はこれらの問題を乳幼児期の愛着形成の連続性について視点をあて調査研究を行った。今回は先行研究の追試のみとなり明確な結論は得られなかった。今後は、「母性」について様々な課題について研鑽をつみ、研究内容を深めていきたいと考える。

参考・引用文献

- 1) J・ボルヴィ、黒田実郎他訳 母子関係の理論 I～III、岩崎学術出版社、1991
- 2) J・ボルヴィ、仁木 武訳 ボルヴィ母と子のアタッチメント 心の安全基地、医歯薬出版株式会社、1996
- 3) 木村留美子 幼少期のAttachmentとInternal Working Model(IWM)および対人関係との関連について、母性衛生、41(1)、2000
- 4) 青柳 肇 ら アダルト アタッチメントとの回想による幼少期のアタッチメントとの関係、早稲田大学紀要、10(7)、1997
- 5) 戸田 弘 Internal Working Model研究の展望、北海道大学教育学部紀要55号、1991
- 6) 金政祐司 成人の愛着スタイル研究の概観と今後の展望－現在、成人の愛着スタイル研究が内包する問題とは－、対人社会心理学研究、第3号、2003
- 7) 花沢成一 母性心理学、医学書院、1992
- 8) 大日向雅美 母性の研究、川島書店、1998